

アルバイトを通して私が出たもの

初めての職探し

二〇一一年にA県の高校を卒業した私は、M大学へ進学した。そんな私を待ちうける難関の一つに、アルバイトというものがあつた。高校生時代にアルバイトをしたことは一度もなかった。まず何から始めていけばいいのかも分からなかった。とにかく働くことができて、お金を稼げるならば、職種なんてなんでもいいと思つていたし、アルバイトを始める前から職種にこだわるのは贅沢だ、とも思つていた。

私の家族は母と祖母の二人だけだ(犬も一匹飼つている)。アルバイトを始めるにあたって、私はその二人に相談をした。その時点では、アルバイト先として自宅から徒歩三分のドラッグストアに目星をつけており、その面接を受けてみたい、と伝えた。二人も、近いから安心だし、良いのではないかと賛成してくれたので、早速私は店に電話をしたのだつた。

電話をしたら、すぐに履歴書を持つて面接に来るようにと言われた。これでアルバイトが決まるかもしれないと、内心ワクワクしながら、張りきつて店へと向かつた。

面接では、簡単な計算と漢字の筆記テストが課せられた。テスト結果がとても良かったらしく、即採用したいと言われたのだ

が、しかしその後、「週三日入れないと採用はできない」と言い加えられた。私は正直驚いてしまった。電話をした時点で私はちゃんと、「土日の二日間しか入れない」と伝えたはずなのに、なぜ今それを言うのか。なぜそれを電話で先に言つてくれなかつたのか。初めての履歴書に悪戦苦闘しながら一生懸命書いた私の苦労を返して欲しいと、そう思った。なんとも残念な気持ちを残したまま、結局そこで採用されることはなく、次の職を探すこととなつた。

二度目の不採用

次に私が見つけたのは、CD・DVDのレンタル・コーナーのスタッフ募集だつた。電話をかけると、とりあえず面接にくるように言われた。働ける曜日について伝えようとしたら、「それは面接のときに聞く」と言う。ドラッグストアのようなことになったら嫌だなあ、と思いつながら面接に向かうと、まず最初に、「今までにアルバイトの経験はあるか」と訊かれた。「ない」と答えると、なんとも渋い顔をされて、私は戸惑つた。嘘をつけることではなかつたし、どうしようと思つていたら、今度は、「アルバイトでいくら稼ぐのが目標か」と訊かれた。私はとても混乱した。

当時私は、アルバイトをして稼げるお金の相場なんて全く知らなかつた。まず、経験がないというのも大きかつたし、アルバイトをしていた友人も自分の周りにいなかったため、話題に上がったこともない。高校生時代の一か月のおこづかいが三千円だつたのだが、それよりは貰えたらいいな、くらいしか今まで考えてい

なかつた私は、苦し紛れに、「相場を全然分かつてないのですが、一万円は欲しいです」と答えた。今なら分かるが、アルバイトで一万円はかなり少ない金額だ。案の定、面接担当者は苦笑い。しまった、と思った。

結局、そこでも採用は決まらなかつた。何も知らないままでは面接には受からないということを感じ、同時に、何かを新しく始めるといふことの大変さを痛感したのだった。

友人がくれたチャンス

この面接から一か月経つた後も、アルバイトは決まらなかつたまま。イタリア料理店のスタッフ募集に応募したりもしていたものの、または面接時に、「人手が足りているから今すぐには採用しない」と言われ、採用はうやむやにされてしまっていた。その時点で、二〇一一年の四月。友人の中には、大学入学前からアルバイトを決めて、すでに働き始めている子もいたため、私は正直とても焦っていた。

ある日、友人のMちゃんと遊びにでかけたとき、私はMちゃんにバイトの話振ってみた。Mちゃんがアルバイトを始めたという話は全く聞いていなかった。きつとMちゃんもアルバイトを探している最中だろうから何か話が共有できるかもしれない、と勝手にそう思っていた。

そんな予想に反して、Mちゃんはもうアルバイトを始めたという。私は驚いて詳細を尋ねてみると、Mちゃんは近くの学習塾で塾講師をしているとのことだった。私だけが決まっていなかったのか、

と内心気落ちしていると、Mちゃんから、「人手が足りないから、ウチの塾の面接を受けてみては」との誘いを受けた。塾で先生をやるなんて全く自信はなかつたけれど、アルバイトが決まつてない私にとっては願つてもないお誘いだ。それに何事もやってみなければ分からない。私はMちゃんの申し出をありがたく受け、Mちゃんが働いている塾に面接希望の電話をかけたのだった。

初めての採用と不安

塾で面接を受け、学力試験を受けた結果、見事採用が決定した。あまりにもアツサリと決まり、とても驚いたのを覚えていた。これが二〇一一年五月のことだ。塾長はとてもものんびりとした雰囲気的女性で、最初に会ったときは、「本当にこの人が塾長なのか？」と疑つたほどだったが、一人で塾の事務処理をこなし、全生徒(当時八十人くらいはいたと思われる)の学力状況を把握している、すごく仕事のできる先生だった。

採用が決まった後日に、他の先生が授業しているのを見学し、さっそく最初の出勤日が決まった。教室に貼つてある講師紹介の紙を見ると、どの先生たちも有名大学に在籍している。それを見た瞬間、私は突然不安になつて、本当に私で塾講師が勤まるのだろうか。中学の理科や社会だって忘れてしまつているかもしれない。数学が大の苦手だから中学一年生の文章題も分からないかもしれない。働いている人たちとも仲良くできるだろうか。かなどなど、言い出したらキリがないくらい色々なことを考えては落ち込んでいた。

しかし、働いている先生たちはみんな気さくで、入ったばかりの私にも気を遣って話しかけてくれたし、みんな、「そんなに肩に力入れなくても大丈夫」と言ってくれた。励ましを受けた私は、働くのがとても楽しみになっていた。もうすぐ、念願のアルバイトが始まるうとしていた。

初めての「仕事」

私の塾講師としての最初の日、私に充てられたのは中学三年生の男の子と女の子だった。その塾では、講師一人につき生徒一人のマンツーマン制、もしくは先生一人につき生徒二人の二対二制をとっているためだ。先生が真ん中に座り、その両脇に生徒の机が並ぶ形だ。私は最初から一対二を上手くやることができるだろうか、と緊張していた。

ついに授業が始まって、まず私が驚いたのは、思った以上に、自分が年下の子たちと会話ができていたことだった。私には兄弟姉妹がいないため、ずっと自分は年下の子とのコミュニケーションが苦手で下手だと思いついてきたのだ。そう思い込んでいた分、「会話できて」と思ったときの驚きは大きかった。人間、やってみないと分からないというのは、こういうことなんだなあ、と改めて感じた瞬間だった。

次に驚いたのは、まささらな状態のままの人間に、新しい知識を教えることの難しさだった。ある程度分かっている子に説明するのは比較的楽だったのだが、何も知識のない子に何かを説明するには、教える側である人間が、教えたい事柄について隅々ま

で把握し、それを飲み込めてないといけない。それができていなければ、分かりやすく教えるということとはできないのだ、そう気づくことができた。ほんの少しだけだが、学校の先生の大変さが分かったような気がした。

最初の授業が何事もなく終わったあと、家に帰ってさらに驚いたことがある。頭と喉がとても痛かったのだ。なんでこんなに痛いのかと、最初は原因が分からなかったが、どうやら講師をしていた間にいつも使わない声を出していたようで、なおかつ、緊張から身体に力が入っていたらしく、それが原因で痛くなったようだった。慣れないことをすると、こんなにも疲れるものなのか、と思った。

二つ目のアルバイト

塾でのアルバイトを始めて半年が過ぎたころ、自分が中学生のときに通っていた別の塾の先生から、その塾で講師をやってくれないかというスカウトの声がかかった。採用が決まらず困っていたときのことを思うと、誰かから必要とされることを一層嬉しく感じていて、断るという選択肢はあめるときは全くなかった。かけ持ちになってもOKだということもあり、私はその塾でもアルバイトをすることに決めた。

新しい塾でのアルバイトは思っていたよりも大変だった。講師の経験があるぶん、新しい塾でも上手く立ち回れるだろうと踏んでいたのだが、予想が大きく外れてしまった。塾が変わればくる生徒の雰囲気も違うのだ。慣れない環境で働くという感覚を、

私は八か月ぶりに思い出ししていた。

簡単にはいかない「仕事」

新しい塾でも中学生たちは良い子ばかりで、なんとか仕事を続けることができていたが、一人だけ全く勉強する気のない子がいた。中学一年生の男の子だ。何を言っても手を進める気はゼロのようで、私一人ではなんともならないと思った。そのため、授業後に先生の相談をしたのだが、「上手くおだてて、なんとかやらせるように仕向けてくれ、頼むよ」と言われて終わってしまった。

私としては、もう打つ手がなくなったから相談をしたのであったが、そんなふう言われてしまつては、やはり自力でなんとかするしかないだろう。「ここまで言うことをきいてくれない生徒は初めてだったので、きつく叱つていいのか、それともとことん優しく接すればいいのか、何も分からなかった。

人数調整のための担当生徒の入れ替えがあつたため、その男子の担当からは外れてしまつたのだが、塾講師として八か月間やつてきた自信のようなものは、この件によつてほとんどなくなつてしまった。しまいには社員の先生に、「君が女性だったから、相手になめられたのだろうね」と片づけられてしまう始末。ここで初めて、働く上での男女差というものを知つたのだつた。

高校生までのように、助けてほしいときに、助けてくれる人がいることが少ないことについても、大学生活を通して少しは学んだつもりだったのに、まだまだ自分の認識が甘かつたのだ。

助けてくれる人がいるということは、とても貴重なことなんだということに改めて気づいた一件であつたのと同時に、仕事をやる厳しさを垣間見た一件でもあつたのだつた。

違う職種の経験

二〇一二年のお正月、私は熱田神宮で巫女のお手伝いを経験した。塾講師だけでなく、他の職種にも触れてみたくなつたからだ。一月の一日～五日のうち三日間勤務するようになっており、お守り・おみくじの授与や、呈茶のお手伝いをするのが仕事だ。一日九時間、初詣客が溢れかえるようになってくる中で、めまぐるしく、ひたすらお守りを渡し続ける。そうやって過ごした日は、家に帰ればもうへトへトで、すぐに布団へ入つて寝るのが当然になつていた。

いつもと違う仕事をする分、目新しいものもたくさんで、とても楽しく働けてはいたのだが、巫女のお手伝いというのは思ったよりも肉体労働だったため、かなり疲れが溜まるというのが難点だった。そう思うと、雨風しのげる建物のなかで、夏にはクーラーにあたりながら、冬には暖房で暖まりながら働ける塾講師というものは、とても良い仕事なのだと思つた。

人間は自分のいる状況に慣れてしまうと、それがたとえ、どんなに恵まれた環境だったとしても、すぐに贅沢を言うようになつてしまう。お金を稼ぐというのは、本来楽にできることではないのだから、そのことを忘れてしまふそうになることが、とても怖いと思う。たまには塾講師以外の仕事をするのも、大切なこ

となのだな、と心から思った。

アルバイトの道のりを振り返って

現在、大学二年生の私だが、今でも二つの塾で講師を続けている。上手くいかないこともあるし、大変なことたくさんあるが、世の中には自分よりもっと大変な思いをしてお金を稼いでいる人もいるのだと思うと、頑張つてやりきることができ。大学一年生のときに味わった連続不採用の経験は、就職活動での心の支えになるかもしれないし、塾や神社で働いた経験は、もつと他の職種とも共通している部分があるかもしれない。アルバイトを通してえた経験は、きつと今後の人生を歩んでいくうえで重要な道標になると思う。この経験を自分の大きな財産として、今後の人生に生かし、進んでいきたいと思う。